博士（文　学）　津　野　倫　明

学位論文題名

近世初期日本政治史の研究

学位論文内容の要旨

本論文は豊臣政権期から徳川政権初期にかけての政治史を、そこにかかわった人物の行動論理と、その行動を規定していた当時の社会慣行から読み解こうとしたものである。当該期に関する研究は、これまで太閤検地論や兵農分離論など、土地制度史や法制史の分野において著しい進展をみせてきた反面、政治史研究の立ち遅れが大きな問題となってきた。個々の人物の行動はしばしば個人的な感情や利害によって説明され、その背景にある規範や論理を探ろうとする視点は希薄であった。本論文は、そのような傾向を打開し、当該期の政治史を、より一貫性のある理論によって見通すことをめざしたものといえる。

第１部「豊臣期における長宗我部氏の領国支配－非有斎を中心に－」では、土佐の長宗我部氏を例に、豊臣政権期の大名がいかなる領国支配を構想していたかについて考察している。まず第１章「問題の所在」において、従来の長宗我部氏研究が土地制度史に著しく偏してきた傾向を批判したのち、第２章以下で長宗我部氏の領国支配構造に関する具体的な検討を行っている。

第２章「一族－津野親忠を中心として－」では、当初、征服した国人家に一族を入嗣させ、各国人領を分掌させる方針をとっていた長宗我部氏が、のちにこれらの一族の弾圧に転じること、第３章「「三家老」」では、かつて長宗我部氏の領国支配において広汎な権力を有していた「三家老」が、豊臣政権期になると１氏を除いて政治活動を停止してしまうこと、第４章「「三人奉行」」では、豊臣政権期の長宗我部氏が官僚的な奉行人組織を整備しつつあったことをそれぞれ明らかにし、その背景に長宗我部氏の分権的支配から集権的支配への構想の転換があったことを指摘している。

第５章「非有斎」では、豊臣政権期において、奉行人に対する指揮権など、領国支配に関して広汎な裁量権を長宗我部氏から委任されていた非有斎という僧侶の存在に注目し、その性格が近世の「出頭人」にあたることを明らかにしている。近世の将軍・大名の重臣は、その地位が家格に由来し、代々世襲される家老型と、非世襲的で、主君の死とともに消滅してしまう出頭人型という２つの類型に分類されるが、僧侶であり、したがって後継者の存在しえない非有斎はまさに出頭人型であり、集権的支配をめざす権力のもとでは、しばしばこのような出頭人型の家臣に権力が集中する傾向があったことを指摘している。

第２部「豊臣政権における「取次」の機能－「中国取次」黒田孝高を中心に－」は豊臣政権と諸大名との意思伝達を担った「取次」に関する考察である。

前近代日本においては権力者と直接交渉することが忌避され、「取次」とよばれる特定の仲介者を立てる伝統・慣行があったが、通説では、いわゆる五大老と豊臣政権との間には「取次」は存在しないと考えられていたため、豊臣政権における「取次」の意義はこれ

まで正当に評価されてこなかった。第１章「問題の所在」では、このような通説の問題点を簡潔に整理し、「取次」に対する再評価の必要性を主張している。

第２章「「中国取次」－黒田孝高・蜂須賀家政－」では黒田孝高と蜂須賀家政が「中国取次」とよばれ、五大老である毛利氏や宇喜多氏の「取次」を務めていた事実を発見し、五大老のもとには「取次」は存在しないとする通説の誤りを正している。

第３章「「中国取次」の実態－黒田孝高と毛利氏の関係を中心に－」では、豊臣政権服属以前にあっては毛利氏に豊臣政権への服属を促し、服属以後においては毛利氏および毛利氏家臣団に対して軍事動員・軍事指揮権を行使するなど、「中国取次」がはたした具体的機能を解明するとともに、とくに黒田孝高が毛利一門吉川氏の後見として、同氏と親密な関係にあったことを明らかにしている。

第４章「「中国取次」の失脚」では、孝高がその後、石田三成らとの対立によって失脚し、「中国取次」としての機能をはたせなくなること、以後、豊臣政権－毛利氏間の意思伝達機能は石田三成と安国寺恵瓊によって担われるが、孝高と親密な関係にあった吉川氏は冷遇され、吉川氏からの上申は一切中央に達しない事態に陥ってしまうことを明らかにしている。そして、「取次」黒田孝高を失った吉川氏のこの逆境は、逆に当該期の諸大名にとって「取次」がいかに不可欠な存在であったかを端的に示していると指摘している。

第３部「徳川政権成立期における「取次」」では、以上のような「取次」をめぐる人脈と論理が豊臣氏から徳川氏への政権交替に及ぼした影響について考察している。まず第１章「問題の所在」では、当該期の政治史研究においてしばしば無批判に用いられてきた「徳川氏による政権奪取」というシェーマがきわめて一面的なとらえ方であることを指摘し、第２章以下で「取次」の動向に着目しながら、この点の具体的な論証を行っている。

秀吉死後に成立した五大老と五奉行による公儀運営体制が徳川家康と石田三成らとの対立によって崩壊し、関ケ原の合戦にいたったこと、この間、家康によって黒田孝高・長政父子の復権が実現したこと、関ケ原の合戦では毛利宗家の輝元が安国寺恵瓊の働きかけで西軍として参戦したのに対し、一門の吉川広家は黒田長政を介して家康と内通し、そのことが東軍の勝利を決定づけたことは周知の事実であるが、第２章「安国寺恵瓊と黒田長政の行動論理」では、彼らの行動がいずれも第２部で明らかにした「取次」をめぐる人脈と論理から合理的に理解できることを論証している。

第３章「「取次」役の変遷」では、合戦直後、黒田長政によって担われていた徳川－毛利間の「取次」役が、その後、毛利氏側の要請で徳川氏譜代の家臣である井伊直政へ、ついで家康の「出頭人」である本多正信・正純父子へと変遷してゆくことを指摘し、毛利氏が家康により近い、有利な人脈を積極的に開拓していった事実を明らかにしている。そして、この事実から、徳川氏の覇権確立の意義を評価する際、徳川氏のイニシアティブによる政権奪取という側面ばかりでなく、徳川氏に対する大名側からの積極的な接近があった点も視野に入れる必要があることを力説している。

以上の行論を通じて、本論文が実践的に説き明かそうとしたのは、これまで個人的な感情や利害によって説明されることの多かった当該期の政治的事件や個々の人物の動向が、概して当時の社会慣行に規定された行動として合理的に理解しうるということ、そして当該期の政治史全体がこの理解にもとづいて書き替えられる必要があるということである。この点をふまえたうえで、本論文は、「出頭人」や「取次」などの社会慣行に着目することが当該期の政治史研究においてきわめて有効な手法であることをあらためて強調し、本論文の「総括」としている。

学位論文審査の要旨

主　査　教　授　井　上　勝　生
副　査　教　授　津　田　芳　郎
副　査　助教授　山　本　文　彦
副　査　助教授　櫻　井　英　治

学　位　論　文　題　名

近世初期日本政治史の研究

本論文における主な成果は以下のとおりである。

まず第1部に関しては、これまで混同されてきた長宗我部氏の「三家老」と「三人奉行」とが別物であることを、史料の入念な読み込みによって論証し、両者の性格の違いと活動時期の差を明確にしえた点が大きな成果といえる。両者の峻別に成功したことにより、豊臣政権期長宗我部氏における家老層の衰退と官僚的な奉行人組織の整備という、重要な史実が明らかとなった。また本論文が非有斎という、これまでほとんど注目されてこなかった人物を発掘しえたことの意義も大きい。いずれも長宗我部氏研究における画期的な発見として、今後、当該研究において繰り返し参照されることは疑いない。

しかし第1部における最大の成果は、一族の弾圧、家老層の衰退、官僚的な奉行人組織の整備という、これら一連の史実の背景に、長宗我部氏の分権的支配から集権的支配への構想の転換という、より大きな流れを看破しえた点であろう。これにより、本論文は、長宗我部氏の領国支配の歴史を、一貫した視座にもとづいて再構成することに成功しえたからである。非有斎という一僧侶に権力が集中してゆくという現象も、この観点に立てばたしかに合理的に説明できる。当該期の家老は一般に大名に匹敵する軍事力を有し、大名からの自立性もきわめて強かったが、集権化をめざす大名にとってこのような家老型の家臣が好ましい存在でなかったことは言うまでもない。そこに集権化をめざす権力のもとで出頭人型の家臣が進出してくる余地があったといえるわけだが、僧侶がその非世襲性ゆえに出頭人型の典型であるという理解はじつに斬新である。この理解は、毛利氏における安国寺恵瓊、徳川氏における以心崇伝など、同時期に踵を接して台頭してくる他の僧侶たちの権力基盤を考えるうえでも貴重な示唆を与えてくれよう。

第2部に関しては、黒田孝高と蜂須賀家政が五大老である毛利氏や宇喜多氏の「取次」を務めていた事実を発見したことによって、五大老のもとには「取次」は存在しないとする通説を覆した点が何よりも大きな成果である。豊臣政権と諸大名との交渉の場で「取次」とよばれる人物がしばしば重要な役割をはたした事実については、これまでも知られてはいたが、諸大名のなかでも中核的存在というべき五大老のもとには「取次」は存在しないと考えられていたことが、「取次」に対する正当な評価を長らく妨げてきた。したがって本論文によって五大老のもとにも「取次」が存在した事実が確認されたことの意義はきわ

めて大きい。これにより当該期の政治史研究は、あらためて「取次」に対する再評価を迫られることになるからである。

第２部第４章および第３部は、この「取次」に着目することによって、豊臣氏から徳川氏への政権交替過程が従来とはまったく異なる理解で見通せることを示した実践的研究部分であるが、関ケ原合戦時に徳川家康と内通した吉川広家の行動や、両者を仲介した黒田長政の行動が、「取次」の由緒を考慮することによって、はるかに合理的に説明できるとした本論文の主張は説得力に富んでいる。さらに、合戦直後、黒田長政によって担われていた徳川－毛利間の「取次」役が、その後、毛利氏側の要請で徳川氏譜代の家臣へ、ついで家康の「出頭人」へと変遷してゆくとの指摘は、これまで無批判に用いられてきた「徳川氏による政権奪取」というシェーマに見直しを迫る有効な提言となりえている。

以上のように当該期の複雑な政治史を、「出頭人」や「取次」に着目することによって明快に説明しえた点は、本論文全編にわたる大きな成果である。ただ、本論文のテーマにも一因はあろうが、「出頭人」や「取次」の起源、そしてそれらを生み出した日本社会の特質等については十分に論じられているわけではなく、また本論文で展開された議論は当該期の他の諸大名についても広く検討される必要がある。これらの点は申請者に今後求められるべき大きな課題となろう。しかし人物の行動論理とその背景にある社会慣行から政治史を解読してゆくという申請者の用いた研究手法が、当該期の政治史研究に有効であることは、本論文によって十分証明され、また人脈が重視される現代日本の政治的土壌を考えるうえでも本論文はじつに興味深い論点を提出しているといえる。以上から本審査委員会は、総合的に評価して本論文は博士（文学）を授与するにふさわしいものであるとの結論に達した。